昭和五十四年五月十二日

盛岡市・県民会館和室

一、内に聞く

また初めからですが、今度は曽我量深先生の『歎異抄聴記』をもう一度一番初めからテキストにしてズーッと読ませて貰いたいと思っております。正直に申しますとこの前のスタートの時にはそが先生の初めの部分は私寄り付けなくて、そこをとばして分かりやすい何とかくっついて行けると思うような処から入らせてもらったのでしたが、今度は何とか、第一頁から分からせてもらえるところだけには違いありませんけれども、分からない処は分からないままにさせてもらって、進めさせてもらいたいと思っております。

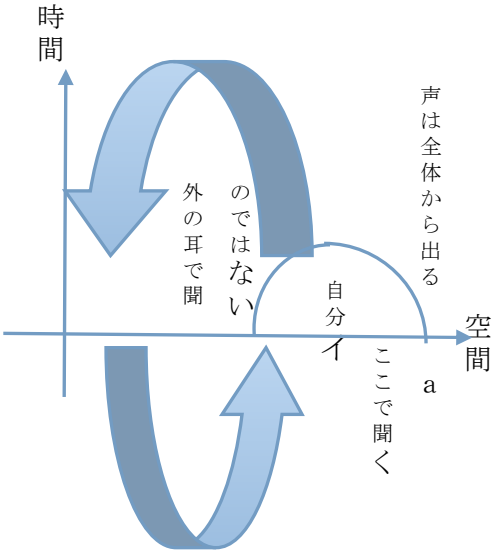
と言うのはこういうものは、他の科学の本のようなものも同じかも知れませんが、自分自身の頭で知識としては、辞書で調べるような知識としてはある程度分かっても、自分の体がそれについて行かないときには、やっぱり分かりません。広く言えばどの学問でも、どの方面の実際の仕事の上でもみな同じことでしょうけれども、特にこういう自分自身を対象にする世界での話はその問題が一番前提に出て来るのではないかと思われます。

何らかの程度に体がそこへ入って行かないと、その問題についての言葉が出て来ない。それは誰かの言葉を、或は読んだ本の言葉をそのまま繰り返しているのならこれは誰にでも出来る。多少無理してでも出来ることがあるかも知れませんですけれども、それでは言葉を繰り返すだけであって自分自身の本当の言葉にならないのですね。内側から出た言葉にはならない。自分自身の内側から出た言葉というものは、外から何らかの意味で入ったにしても、自分自身の体の中に入って自分自身の体を通して、どうしてもこの言葉を出さずにはおけないというような、下から涌いて来ると言いますか、そうきれいな言葉では言えませんけれども、内側から出て来るものでないといわゆる言葉ということにはならないように思う。

この二・三年ズーッと『歎異抄』をお陰様で読み通させてもらって、さて自分自身を振り返ってみると、言葉そのものは（今の言い方も実は訂正しなければならないでしょうが）内側から出るとは申しました。けれども、実は内側からには違いない、頭から口へスーッと出て来るのではない。耳から口へ出て来るのではないには違いないけれども、内側からと言っても実は自分自身の中か

らは出て来ないので、自分自身の分からないもう一つ奥の方から、奥というと何か勿体をつけるようですけれども、自分自身のほかからどっから出て来るか知らないけれども、空からか何か分からないけれども、どっからか来る、国籍のない言葉が自分自身の中を通ってに出て来る。そしてそれが自分の声になるのであって、自分の声でありながら実は誰の声だか分からない。そういうような声がこういう世界の声ではないかと、こう思うのですが。どういうように言い表したらいいか。　相変わらずいつもの癖ですが、こういうように書き慣れて来ましたけれども、今の気持ちを表わすにはどうも都合が悪いような気もするが、あるいはこれで良いのかも知れないが。つまり「自分」（図Ⅰ線ａ上の半円）というのはこういうものだ。こっち（線ａから下）は分からない。有るのか無いのか分からない。有るのはこれだけ（線ａより上の部分）である。これが五十年なり七十年なりの、我々の一生の自分である。こういうものが時間と空間との両方の条件の上で、時間・空間をこう（線ａの方向へ）移って行く。

第　Ⅰ　図



声はどこから聞こえて来るかと言うと、声はこれ（矢印をたどって）全体のどっからか分からないが、ここ（点イ）から声が出て来る。内側からということにしますと、こうして（点線をたどる）声として出て来る。聞くのも実はここ（点イ）から聞く。声の出所から聞く。何故ならこの声が入って来るのはここのですから。

耳はここ（点イ）にある、と言ったらいいでしょうかね。だから金子大栄先生も曽我量深先生も「内に聞く」と言われる。外にある、ここ（半円の外側）にある耳で聞くのではなしに、内の耳で聞く。

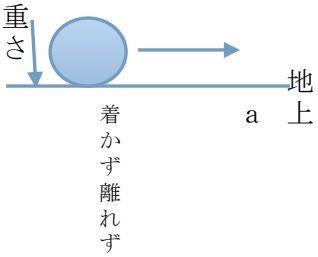
だから声も外に出すには違いないが、外に出す前にいわば内に一応出している。内に出す。内の声は当然外の声にはなるのだけれども、外へではない、内に出す声。だから「称名」というのは必ずしも声に出さなくても内の称名でもいい訳だ。それを「憶念」という。仏を憶念する。

二、百パーセント仏力の世界

で、私の言いたいところは、どうももう一つ出て来ないのだけれども。私の言いたいのはこういう存在が、こう書いてしまっては（図Ⅱ）、これがくっついてしまっては困る（円と直線が）のだけれども、こういうもの（円）としてこの線の上を転がっている。この地上を転がっている。つまりこれ（円）がこれ（線）に着いていないのですね。着かず離れずということでしょう。

つまりこの体が、体そのものとしてただそちらの方（矢印）へ、時間と空間に、風に吹かれて飛んで行くようにただ転がって行く。この円と線との間にあるものは、理想的な言葉で言えば「執着」と言うのでしょうかね。この風に吹かれて転がって行くことは執着がないのだと言うのならちょっと困るのだけれども・・・。

第Ⅱ図



実は我々はここに自分の重さでこの地上と接近しているということ自体がこれが「執着」なのである。それで、この執着を断つということが従来の宗教の、とくにに仏教の根本課題なわけですね。ところが今私が言いたいは、そうではなしに、実は我々は執着そのものなのだと。これ全体の重みがそのまま執着という形をとってここにいるのだと。だからこの執着を取れということになると、この重み、重量そのものを取ってしまえということになる。それは不可能である。そうすれば、元も子もなくなる。

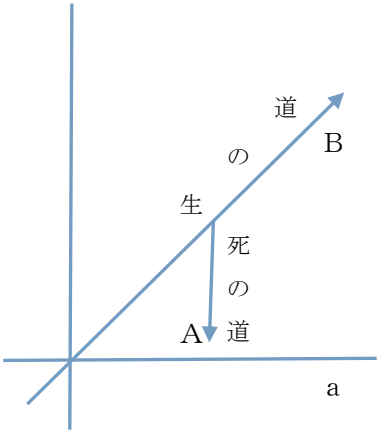
我々が生きているということは、つまり執着そのものなのである。これ全体（円全体）が執着そのものなのである。だから執着が執着自身を取るということは、つま

り駄々ッ子が大地の上に腰を据えて駄々をこねていると同じことなのである。執着そのものが、また一つの執着になる。執着そのものが余計ここに執着を作っている。それ以外の何物でもない。

その限りこれ（円）は動かない。ここ（円）の重みで動かない。ではどうしてこれが動いて行くかというと、動かされるという道を考える他はない。つまり、これが動いて行くということは百パーセント他力なのである。自分の力があって、その自分の力では、自力では駄目だから他力にしようという部分的な他力ではないのであって、自力にしようということ全体を挙げて他力にする。

それを一面からこういうように見て、別にまた、こういうように言うことも出来るようですね。この世に生まれて我々は何とか、つまりこの世間の上でのいわゆる立身出世というような形で、あるいはそういう形をとらなくても植物なら植物の生長という形で、これをこちらへ（図Ⅲの線Ｂの方向）進んで発展とか生長をとげる。これは当然自然の姿でしょうね。ところが、それだけの姿ならば、それはそれでいい訳である。世間はそれでいい訳である。自然に生老病死の変化を通ってどこかで生命が尽きて、それでいい訳である。つまりこの一本道（線Ｂ）ですね。こちら（線Ａ）の方は考えない。

第Ⅲ図



ところが何かのことで、我々の道はこれ（線Ｂ）しか他に生きて行く道はないのだが、同時に心がこちらの方（線Ａの方向）を向いてしまう。その時、これをどういう言葉で表せばいいのか。これ（線Ｂ）を「生きて行く道」とすれば、これ（線Ａ）は「死の道」と言っておきましょう。死をもって代表させる。生きて行くということが、それだけで終わって行けばいいけれども、それだけで何も気付かずに行けばいいけれども。何かの時に、広い意味で死という方向に心がフッと気が付いた時に、この道（線Ｂ）だけでは行けなくなる。たえずこちら（線

Aの方向）へ心が動いて、これが不安である。そういう状態が不安である。

この不安をどうして消すか。あるいはこの不安からどうして逃れるかというのに、今までのように「生」ひとつ、「生」だけで生きて来たつもりがそれが二つに分かれて、「生と死」という二つに分かれて問題が出て来る。この生と死との二つの分裂をどういうふうに克服するかというところに、昔の人のいろいろな努力があったのですね。

聖道門では、つまり自力の世界ではこの「生の道」と「死の道」との、この二つの道を「生」にいて生から脱却しようという道を生きようとする。つまり良い意味で死の方にという一つの道で生きる。こういう二人いる訳ではないのですから、ここ（線B上）に自分がいてここ（線A上）に別な自分がいる、まあそう言っていいのですけれども、結局は同じ人ですね。同じ人だが二つに分かれているのである。一人の人が「生の自分」と「死の方の自分」と二つに分かれている。そこで二つに分かれた自分をどちらかで一方を片付けていこう、一方を克服して行こう。そこに闘いが起こる。

生の側の自分というのは分かるが、死の方の自分というのは分かりにくくなりますから、生の側の自分と死の側の自分とこのように申しましょうか。そうすると生の方の自分を「B」とし、死の側の自分を「A」とする。この場合はAでBに打ち勝って行く。つまり克服して行く。AでBを克服する。これが自力の世界ですね。聖道門である。それはつまり同じBという一つの自分を、Aという別の自分で追っ掛けて行くと言いますか、BがAを追っ掛けて行くという、そういう意味では一本道になりますね。AがBを追っ掛けて行くという一本道になる。

ここにまたいろいろな、『華厳経』などで言われるような、十の階段なども出て来る訳である。第一段・第二段・第三段・・と殆どAに追い付きかけた。八段目からは本当にAがBを捕まえた。まだ完全にはBから脱却していないけれども、第八段階ではBを自分のものにした。そして自分のものにした世界を第九段・第十段に至って初めてBとAとが完全に一つになって、仏の世界ができた。まあ、こういうようにも言える。

第八段の一つ手前の第七の段階では、もう九分九厘、ほとんどもうBを捕まえたと同じだという時に、お釈迦さんのいわゆる悟りを開いたという瞬間が来た。そこで

何らかの意味でやれやれと思った。自分自身はそれで救われた。この「自分」という一つの線はこれで目的は達せられた。そこで腰を下ろしてしまうというおそれがある。お釈迦さんも自分の悟った世界の中にズーッと入り込んでしまって、もう動きたくなかった。

それが、そのままに終わってしまうと例の「七地沈空の難」ですね。第七番目と第八番目との間にそういう一種の虚無の世界がある。悟りを開いた、やれやれと思った時、虚無の状態がそこに来る。これは非常に危険である。そこを乗り越えて第八地に至ると、完全に後戻りしない。

お釈迦さんはそこで、自分の個人の悟りを開いたところに留まろうとしたのを、「いや、そうしていては駄目だ」というので、他の仏さんがお釈迦さんに勧めて、どうぞその境地を一般の世間に広めてくれ、他の人々に教えてやってくれと言われて、それから仏としてのいわゆる、一切の衆生を救おうという、自分だけが悟るのではない、自分が悟った世界を一切衆生に教えを分けてやろうという、仏としての働きがそこに出て来た。そういうように言われる。

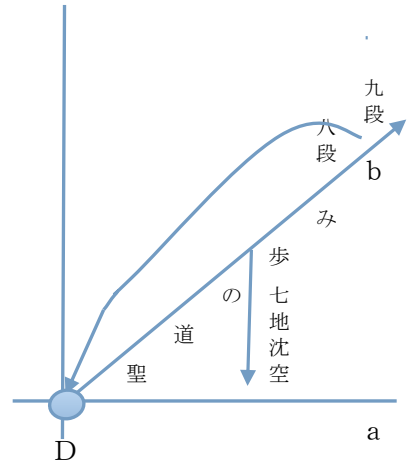
こういうように、同じ自分の中でBとAとに分かれて、Bの自分をAの自分が追い掛けて行って克服すると、こういう一筋の道、これが聖道門なのでしょうね。これはいま申しましたように、第一地・第二地・第三地というこういう険しい修行の山を上って行かなければならない。最後に到達したと思ってやれやれと思った瞬間に又、もう一遍ドボーンと虚無に落ちるというような大きな危険もある。

これは私が勝手にそれから推察するのですが、親鸞聖人もおそらく叡山の生活では、法然上人もみなここを登って行かれた。登って行って、ほとんどおそらく七地、八地くらいまでは行かれたのだろうと思うのですね。行かれたのだろうけれども、どうしても最後のところが突き抜けられない。

しかし、後になって我々の方から考えてみると、親鸞聖人や法然上人が突き抜けられたならお釈迦さんと同じようになられるのだけれども、お釈迦さん自身が突き抜けてそれから後のお仕事は今度はこの地上の生活に帰って来ることであると、そういうことが分かっているならば、つまり、この世界（図Ⅳの Cの世界）をここ（線ｂ上）で予感してしまったらですね、それならばここ（Cの世界）に行かないでも、そのままでもう仏の世界であ

る。

　我々のいるのは修行の世界である。現世の世界である。そこでこの仏の世界を先取りしてしまった法然上人は



もう一遍スパーッとここ（点D）に帰って来てしまった。帰ってしまった、ここ（点D）は何かと言えば、ここ（C）は仏ならばこれ（点D）は仏の正反対の両極端ですから、煩悩熾盛の凡夫である。それを別の言葉で言えば罪悪深重の凡夫である。

　煩悩熾盛とか罪悪深重という言葉はどうして出て来るかと言えば、この世間の人はただこのように自分の道を進んでいると、世間として進んでいる人にはそういう言葉は出て来ない。勿論善悪の世界は出て来ますよ、道徳の世界だから。善悪が出て来る限りは、悪い奴だ、善い奴だとか、あるいは自分自身も憎いとか、可愛いいという問題は勿論出て来る。これは人間の実態なのだから。その人間の実態が宗教的な実態になっておらない。つまりこの実態には、これを全体として照らす、つまりこれを一つの極端として、これの正反対の仏の世界というものは常識の世界では出ていないのですから、。

　それを『歎異抄』では、「われわれは善いとか悪いとかは知らない。全然知らない訳ではないけれども、仏が善しと知られているほどわれわれは善いということを知らない。仏が悪いと知っておられるほど、われわれは悪いと分かっているのではないから、善悪は知らないのだ」と親鸞聖人はおしゃっている（後序）。この常識の世界では仏というものは出て来ない。

　先週ある集まりでたまたま宗教の話が出た。ある著名な文化人、女の人でしたが、「カソリックの神父さんから、『あなたは奇跡を信じますか』と聞かれた時、『私は信じません』とはっきり答えました。そしたら『奇跡を信じないのでは話しにならないので困りましたな』と言われた。でも私はキリストの奇跡は絶対に信じません」とこ

う話しておられましたが。その気持ちは分かる。この（常識の）世界にいる限り奇跡など入って来ようがないのだから。仏とか神というものは、この世界には全然縁のない言葉なのだから。それにすると幽霊というのは、まだどっかちょっと縁がありますね。しかし、もうそういう文化人になると幽霊などとは、真面目には縁がないと思っているだろうから。

しかし、子供のときに便所に行くのが怖かったというような潜在観念があるから、子供からもしお母ちゃん幽霊というものがあるかと聞かれたら、そんなもの迷信だハッキリ言われるとおもうのですが、そういう人は。しかし全然心の中から幽霊というものが縁がないとまで言えるだろうか。しかし幽霊に比べれば奇跡などというものは絶対信じません、「私はそういうものは全然問題になりません」と至極愉快そうに、楽しそうに言っておられるのですね。その気持ちは分かる。その人の気持ちは分かるのですけれども、それだけではどうにも仕様がないと思うのだね。

それで結構なのですよ。奇跡など現れる必要はないのだから、この世界では。自動車事故のようにたまたま四号線で道に立っていたら、自動車のほうから、暴走族がぶつかって来たという奇跡が、それはそれでいい。良いのだけれども、その人が一生涯を通して、そういう朗らかな明るい愉快な気持ちで奇跡といった問題と縁がなしで通れるかどうか、これは誰も保証しないのだね。

自力の世界では自分が自分を追って行く。自分が自分が追って行くから、どっか自分と自分がつながっているのでしょうね。それは今までの自分を否定して、否定して、最後の否定の一番先端にある所まで行く、そこに大きな肯定が出る。そうすると、いままでの過去の自分は否定だから全くない、肯定の自分だけがそこにある。でもこれは対立がないですね、その意味で。ＢとＡという対立はあるけれども、ＢとＡは同じ一つのもので追っかけっこしているのだから。

ところが今言ったように、親鸞聖人や法然上人はここまで来られたけれども、ここで仏の世界を先取して、もともとチャンとあるこの衆生の世界に帰るのならば、じゃあまあここでサッとここに帰ってしまった。そこは煩悩熾盛。そしたらこの仏の世界を捨てたかというとそうではない。仏の世界が前にあればこそ煩悩熾盛の世界に帰ったのだ。ここで衆生の世界と仏の世界とのはっきりした対立が出る訳である。この対立は初めのようなＢ

がＡを追っ掛けて行くというような関係ではなしに、ＡとＢとは対立しながら離れることが出来ない。離れることが出来ないから、対立だというような、そういう意味の対立なのですから。

初めのところではＡはいつかＢに追い付けるという望みがあった訳である。Ａはいつかのところに行って、ＢとＡとが一つになれるという望みがあった。そして、途中まで来たけれども「ああ。本当に駄目だ」と分かって帰ったのだから望みがない、ＢとＡとは。つまり衆生と仏とはその意味でプッツリ切れてしまう。ある意味で「断絶」した訳ですね。

断絶したものだから、このものはこのもとしてただそこにある。「孤」としてある。「孤独」の孤ですね。天涯孤独。だけれどこのときの孤は背後の、全体の、その仏と切っても切れない、しかも断絶した関係なのである。これはだから下から上へ登って行く向上の関係ではない。同一平面上の関係である。切っても切れない関係であって、しかも完全に断絶している。

だから、断絶という意味では煩悩熾盛の凡夫、罪悪深重の凡夫というより他に何もない。ＡからＢを追いかけて行くという力、つまり自力は何もない。自力の持ちようがない。この世界は全く自力はない。もし力があるとすればそれはことごとく仏とのつながりで引っ張られて行く力である。

断絶だということは、衆生の方の力が、仏の方へほんの僅かでも向いて行かないから、行きようがないから、全く「孤」として力の出しようがないから、その意味で衆生は全く無力である。無力であってしかも一方では切っても切れない糸によってつながれているという所がそれが他力である。その力はことごとく仏から来る。大分苦しい説明ですか。

この仏からの力は百パーセント仏の力である。我々の力というものは百パーセント仏の力なのである。

三、「我が国に生まれんと欲せよ」

その仏の力はここでどういう言葉で表されているかと言うと、「至心、信楽」という言葉で表されている。第十八願の「至心、信楽」、これはみな仏の心、仏の力である。ところがその次に「欲生我国」が付いているのですね。

「至心、信楽」だけでは仏そのものの世界である。純粋の世界である、疑いのない汚れのない世界。「至心、信楽」だけだと、曽我先生に言わせると、衆生が出て来ないという。衆生が出て来ない、あまりこれは純粋過ぎて。

「至心、信楽」に照らして煩悩熾盛、罪悪深重ということが意味をなすのですね。世間の世界では「至心、信楽」というものはないから罪悪深重ということは出て来ない。

ロッキード事件などを見ているとそうだと思う。五億円をある処までとったらしいということは分かるけれども、最後に本人がそれはそうだ、その通りとりましたと言わないから。と言うのはそれは総理大臣の気持ちになってみなければこれは分からないことだが。

絶対的な「至心、信楽」という世界はこの我々の世間には出て来ない。絶対的な「至心、信楽」の世界が出て来ない限り、絶対的な煩悩熾盛・罪悪深重というものは出て来ない。九分九厘、我々の常識で国民が確かにあれは五億円貰ったに違いないと言ってみても、本人が言わないのは怪しからんと我々は憤慨するけれども、よく考えてみるとですね。言えないのは無理もないと思うのだ。

「至心、信楽」という百パーセントの清浄さが後ろにあった時に初めて自分がその前へ出て「ああ、俺にこのようなやましい陰があるなあ」とハッキリ。これは消しようのない痛みとして出て来るはずだけれども、それがないものだから、「いや、確かにどうも俺も少し悪いようだけれども、しかし俺より悪いことをしている者がまだもっとあるだろう」とか、「俺は五億円くらいだからなあ、もっと大きな金ならば別だけれども」などとなんのかんのと言う。

それは煩悩熾盛ということは百パーセントの明るさがないと出て来ない。だから必ずしも「ああいう高位高官の者は、あんな奴は駄目だ」などと、他人事のように責める訳にはいかぬと僕は思うのだね。僕なども同じ立場になったら言おうか言うまいかという気持ちが出るのではないかと思うのですが、どうでしょうか。一遍なってみたいかな、そういう立場に。しかし、五億円くらいで人間一生の問題があまで言われるのは余り面白くないな。せめて地球一つくらい買えるくらいの金ならやってもいいかもしれないけれども。三億とか五億円位でね。新聞を賑わわす程度にいっているというのは余り愉快でないね。

だから煩悩熾盛、罪悪深重と『歎異抄』にいつも出て来るけれども、これは一方にこれと相対的に「至心・信楽」の世界があるからなのですね。ただ「至心・信楽」だけでは、こちらは煩悩熾盛、罪悪深重なのだけれども、もうひとつそこに係わりが付いて来ないというのは、曽我先生面白いことを言ってものだ私は思うのだ。それで

は何で係わりがつくのか、次の「欲生我国」で係わりがつくと言われるのだ。成程なあと、ここで私はハッと気づかされた。

「我国に生まれんと欲せよ」と。「私の世界に来い」と。この「生まれる」というのは、仏さんは初めからそこにいるのだから。この「生まれる」は衆生の方にそういう心を起こさせようというのである。この「至心・生楽」の世界へ、煩悩熾盛、罪悪深重の者が生まれて来い。ここに仏と衆生との結びつきがつく。

この結びつきは、自力の世界では、煩悩熾盛の者が仏の世界に行こうとして自分で自分を追い立てて、一本道で行く。つまり自分を自分が追いたててズーッと登って行って難行苦行して最後の段階でこの二つのものが、BとAとが一つになって仏の世界を実現するのだとこういう一筋の道を行く。他力の世界ではそうじゃなしに、仏と衆生との二つの対立にして、対立にするかぎり、対立が対立として意味を持つということは、絶対に一つにはならないということが一方にはあるわけですね。

それは絶望である。個人としては悟りを開くということは絶望である。自分で自分を救済するということは絶望である。絶縁である。絶縁であってしかもそれであるが故にこれは一つなのだと、その一つなのだというのは、そうだから仏の方から衆生の方を救うと。何もかも全部の力を仏の方から衆生の方へ回してくれる。

この力が「至心、信楽」。わしは「至心、信楽」だ、お前は「欲生我国」だ、と。これで初めてAとBとが全く相い容れないものであってしかも一つであると。これが「摂取」ということなのでしょうね。

だからここに転がって行く（図Ⅱ）という自分という者は、この実態は何かと言われると煩悩熾盛、罪悪深重と言われる以外の何者でもない。この何もないということは何辺言っても言い足りないと思うのですね。本当に何もないのだと。そう言ってみても多少はしかし、真面目だとかあるいは良い心もあるだろうとこう言うのは世間の話はではそうだ。世間の道徳の世界ではそれでよい。ただしこの世界ではそうじゃない。「至心、信楽」というのが、むこうにあると言う限り、こちらは全くそれの陰しかない。こちらが全く白ならばこちらは全く黒なのである。全く何もない、本当に何もないというところに一度とにかく立ってみなければならない。そうしてみれば後はどうするのだ。後はこちらの光りに、こちらの力に任されて転がされて行くだけのことである。この空間の

尽きる限り、あるいは時間の尽きる限り、この存在がこの（仏）力に引っ張られて行くだけのことである。これは「自然（じねん）のことわり」である。一切を仏に任せてということはそういうことなのですね。

この「欲生我国」、「我国」ですから仏の世界なのですから、これを「お浄土」と言っている訳ですね。何故僕らは浄土へ来いとおっしゃるのだろうかと。

昔の人は多分親鸞聖人の時代、あるいはそれまでの鎌倉時代以前の時代からズーッと鎌倉時代まで来ての庶民の暮らしの苦しさというものから言えば、この頃よくテレビのドラマに終戦の引き揚げなどの苦しみのドラマなどがよく出ていますが、ああいう苦しみは、僕はたまたま朝鮮にいて申し訳ないけれども終戦当時の苦しみを本当にあれほど深刻に味わっていない訳だ。

なるほど引き揚げなども形だけは一応ああいう目に遭ってきたけれども、ドラマでやっているようなあんな・・。それから内地の終戦当時の食べ物の問題、ああいう苦しみをあれ程までに私は味わっていないから余り勝手なことは言えないのだけれども。それからよくこの頃親子心中がありますね。サラ金などの問題では。あの世へ行きたい。何らかの意味で、しかし、この頃の自殺する人は「あの世」というような意識は余りないのではないかな。とにかく今のこの苦しみから逃げたいというほうが主なのではないだろうか。どうだろうか。そんな勝手なことは言えないかもしれないけれども。

本当にあの世は楽しい処だから行こうというような、そういうような積極的なこちらの知識があるからではないじゃあないかな。いまの教育でもしそういうものがるとすれば、自然界の知識だけは与えているだろう。それならと言って、死んで象の世界へ行きたいとか虎の世界へ行きたいとか、そのような気持ちが起きるはずはないね。今の子供たちは。

そうすれば行き処がないということになる。そこにたまたまあの平安・鎌倉時代には何らかの意味であの世というものが何らかの程度に明るい楽しい温かい世界がある。そこへこんな親子毎日毎晩寒いおもいをして、そして空腹をして生きているよりは、思い切って死んで永遠に温かい空腹のない楽しい処に行こうではないかという気持ちも起こったのではないかと思いますがどういうものでしょうか。

それはまあ一面的な見方であって、本来の「欲生」というのは、死をどう逃れるかという問題でしょうね。そ

こでよく死ぬことは怖い。しかし考えてみると死ぬことが怖いと言っているが、なに怖いと言っているのは生きている間のことで死ぬときには何も分からないのだからいいのですよと、そういう気楽な話もありましたが。

しかし確かにそれはそうなので、死ぬことは怖いということは実はそう怖くないのだね。本当に怖いのは死ぬことではなしに本当に一人になるということなのだろうと思うのだね。つまり死に面したときが怖いのであって、本当に虚無に面したときに、これは前にも申したかも知れませんが、港に立っていて、そこへ向こうの方から船がズーッと来た。そこで我れ勝ちにその船に乗ろうとして時に、その船は「ちょと待て。この船は虚無の大海へ行く船である」とこう言った。そしたらいままで我れ勝ちに乗ろうとしてガーッと来た人がみんな尻込みして、誰も足を踏み入れる人はなかった。そういうことがちょっと書いてあった。

本当に独りぼっちだ、本当に独りぼっちだということが一番これが怖いのではないかと思うのだ。この世から死んで行くときも、死が怖いのではない。死ぬことによって独りになることが怖いのではないでしょうか。そういう思い出は子供の時にたまたま迷子になって、どっか知らない処へポッと迷子になって気が付いたら家がどこだか、お母さんなども見えなくなってしまって分からない。何とも言えない悲しい思いがありますね。

それよりももっと、いま病気なら病気で死ぬときに、病気で死ぬということが別に悲しいのではない、今ここで目をつむってその先に誰もおらぬということである。つまり虚無に直面するということが一番怖いのではないかな。言い換えれば行き処がない。この世からあの世へ行くということは、どこかそっちでちゃんと待ち構えていてくれる処があれば、それは喜んで行ける。悲しんでいるかもしれないけれども悲しみながらも行けるかもしれない。ここまで来たけれども「さあ、行け行け」、行こうと思ったが行く先には何もない。これが一番怖いことではないだろうか。行く先に何もないということ。どうして足を踏み出したら良いか分からない。いよいよという時になると踏みださされる、押されるということに気が付いた時に、これは誰でも悲鳴をあげざるを得ないところではないかな。

そこに「欲生我国」「我国に生まれんと思え」、わしの方へ引き取ってやろうと言ってくれる声。「至心、信楽」を具体化した声でしょうね、これは。「至心、信楽」これ

が仏の世界とすれば、「欲生我国」これは衆生の世界への呼びかけであり、この二つで初めて仏と衆生とが具体的に一つになれる。本当に我々が仏のお体に抱きとられるというのはそういうことです。　どうもそこの処がもう一つ抽象的な言葉しか出せませんが、これは私自身がまだ抽象的なせいだと思うのです。

　ただね、この曽我先生が書いておられるのを見てハッと気が付いたのは、こういうことなのです。よく人に紹介されて「今後ともよろしくお願いします」、そこまではよく言いますね。その時こっちの気持ちは、招待された宴かなにかで親しくなって、その時に最後にもう一つ言うことがある。「どうぞ家へ遊びに来て下さい」とこう言うでしょう。あれだと思うのだ「欲生我国」というのは。どうも日本人は、外国人のそう言うか分からないが、日本人は。

　僕はつい言い過ぎる事もある訳だ。本当に来られては困るという人もある訳だ。それから人によっては、そう言っては失礼に当たるという人もある訳だ。なあにお前の処などにはと思っている人にまで、こちらはついね、「どうぞ、来て下さい」「どうぞお立ち寄り下さい」と。そしてよく世間では儀礼的に言っていますね。行ったら実際困る人も相当あるように思うのだ。

　田舎の家では、みな朝から晩まで外へ行って仕事をしているような処では。町の方からそっちの方へ行ったからといって、ついでに「この前寄ってみろ、と言ったから」と行ってみると、みんな外へ出て作業着を着て仕事をしている。そこへ行ってたとえ一時間でも邪魔すると非常に迷惑だ。だけども考えてみると「家へ遊びに来て下さい」とこう言わなければ意味が本当は完了しないのだね。それでお互いに本当の安らぎがそこへ出て来る。

　仏の方から、「お前を本当に自分のことと思っているぞ」と「思っているぞ」と言うだけではそれは「一心帰命」ですね。「一心帰命」こっちの心と向こうの心が一つになった。そうに違いないがそれだけではもう一つ具体性がない訳である。「一心帰命」だけでは抽象的だと、曽我先生は言う。それが具体的なものになるのは「欲生我国」が後に付いて初めて具体的になる。

　「やあ、これはまあ、今後ともまたよろしくお願いします。じゃあ是非また私の家に遊びに来て下さい」とこう言う。そういうように、「うちの国に来てくれ」というので初めて本当に向こうの人の身体がすっかりこっちへ来たことになる。向こうの人の心が百パーセントこっち

へ来たことになる。それは身体ごとだね。その代わり向こう側に立ってみると、心だけが通っただけでない身体までもそっちへ預けたということになる。これが他力なのですね。

紹介状のような場合にはそれ以外のことも出て来ますね。サラ金や何かの関係でやり取りしていて、「やあ、家へも来て下さい」などとうっかり言えるものではない。お互いに別の心をちゃんと持っているから。身体はこっちへ残しておいて言葉だけでやり取りしているから。そうでない、「今度こっちへ来られたら是非私のお家へ来て下さい。これをご縁にひとつ来て下さい」、こう心も身体もそっくり一つになってしまう。これが他力なのである。全然自力をまじえない。

そう言ってみるとですね。我々五十年・七十年の生涯をこの地上をコロコロ・コロコロとどういう風の吹き回しでどっちへ転がって行くか。この道は山であるか、川であるか、坂道であるか、ドロドロの道なのか、あるいは草花なのか、あるいは石コロばかりの道なのか。これは業縁に任せるより仕様がない。僕がまるまるとした円であるか、三角であるか、五角であるか、あるいは細長い円筒形であるか、あるいは棒のような形であるか、これはみな業縁に任せるより仕様がない。ここへ出てしまってから、俺は円いのは厭だ、もっと棒のようなものがよかったと言ってみても仕様がない、これが業縁である。業縁に任せて時間・空間の間を引っ張られて行く、転がって行く。全く百パーセント自力ではない。行き先はどこだと言えば向こうの家へ行く。遊びに来てくれ、是非こっちへ来てくれと言われたからそこへ行くのだ。その行くこっちの気持ちは煩悩熾盛なのだが、来てくれという向こうの気持ちは「至心、信楽」なのである。

至心は信楽だけでない、その上おまけに「わしの家へ是非来てくれ」という「わしの浄土へ是非来てくれ」と「欲生我国」と声をかけてくれている。それに任せてただ行くだけである。現実の姿はそれは業縁によって、女であり、男であり、病人であり、達者なものであり、賢い人であり、愚かな人であり、あるいは嘘つきであり、泥棒であるかも知れない。悪いこともせずにおれない存在であるかも知れない。にもかかわらずことごとくこれは他力である。爪の垢ほども自力というものはここにはない。

ここ（図Ⅰイ）から出る声は「至心、信楽」「欲生我国」の声が、つまり一番初めに話したように、これからこの

自分の内から、内を通って外に出ている。だから「聞く」のも外の耳から聞くのではないのであって、自分の内の耳で聞く。だから「内に聞く」といままでよく金子先生が言われてますですね。だから仏の声は称えるのだけれども、これは聞くのである。

念仏はむしろ聞くのである。聞くのであるということは念仏でありながら聞く、称名でありながら聞くということは、つまり「憶念する」ということである。内側に聞くのですから「憶念」である。だから念仏は自分の声でありながら、自分の声でない。自分を通して出て来る。自分が出す声ではない。自分の内から、自分を通して出て来る念仏である。

自分の声ではないということは煩悩熾盛、罪悪深重の中からは声は出ない。そこから出る声は自分を通して出る自分ならぬものの声である。言い換えれば「至心、信楽」「欲生我国」の声が念仏になって出て来る。だからこれは幾ら称えたからいいというものでもなければ、いついっかどういうような形で称えなければならないというものではない。内側から出て来るのである。生きて行くということは要するにそれだけのことなのである。極めて単純なことである。なにも難しいこともない。なにの賢さも要らない。考えることも要らない。考えて出るものではないのだから。

「欲生我国」をいまのように言ってみたら、僕は良い思い付きだと思うのですが、どうです無理はないでしょう。だからよく人と会って、やはり何か用心しているときには、「やあ。家に来て下さい」とは言えないね。

『歎異抄』全体を通して読ませてもらって、いまやっとたどり着いた気持ちはこういう気持ちなのです。当たっているかいないか、ご披露した訳です。

四、『歎異抄』の根本概念

我々の自分というものは、自分と存在との間に何の思慮分別も勿論ないということ。それは業縁によって決まるだけのものである、与えられたものである。生きているということは生かされているということ以外に何もない。しかし人間というものは自覚的存在であるということはある意味では辛いことなのだね。自覚などなければ一番気楽で問題が無くて良いのだろうけれども、これだけは避けられない。

自覚的存在であるということは自分の存在を自分で確かめるしか仕様がない。確かめるということさえ確かめ

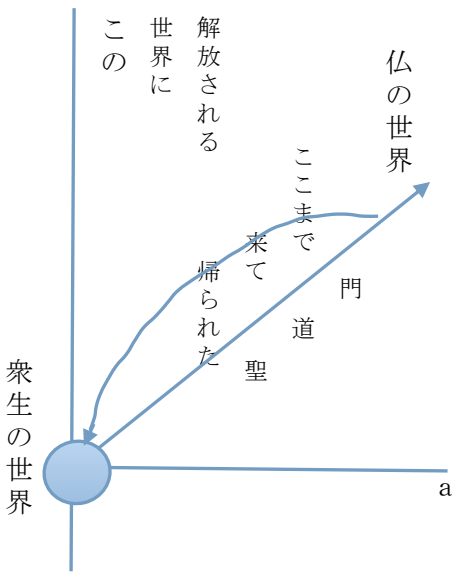
られる以外に何もない。どういう形で確かめられるかというと、自分の中から出て来る念仏によって自分自身が確かめられていくということを確かめるのでしょうね。そう考えてみると、念仏というものは不思議な、結構なものだと言わなければならない。自覚を自覚させてくれる一つの方便である。そういう一つの方便によって、何百年という間、こういう大きな歴史の生命が支えられて来たのですね。そういう他力の何百年という歴史の反面に痛ましくも無い力を出して自分で自分を確かめようという自力の世界がズーッと続いて来た。

で、おそらく自力の世界というのはいわゆる世間と他力の世界との中間的なものではないのかな。中間的なものとして自力の世界がある。勿論その中にはいろいろ段階があるのでしょうけれども。その一番世間に近い姿が現世利益で、禅宗の方はおそらく他力の方に近い。ある意味では他力そのものであるかも知れない。かも知れないけれども、他力の世界にタッチする仕方に何か無理があるのではないでしょうかね。

で、親鸞聖人がそういう歴史的な段階を自分個人の上に体験して来て、自力の世界をズーッと行けるだけ行ってグウッと他力の世界に入って行った。他力の世界に入って行ったということは本当にこうでなければ生きようがないという自分の処へ帰って来て、気が付いてみると「ああ、これが絶対他力だ」と。そこに落ち着かれた。それ以上のことは私は言うべきことではないけれども、親鸞聖人ご自身もお若いときからズーッと晩年に至るまでの深み、「深み」と言って勿体をつける訳ではありませんが、当然そうなっていかなければならい道に深まりというものが、あったのでしょうね。

その深まりの最後がこの『歎異抄』に余すところなく映つされているかどうかということは、それはまた問題だと歴史家の話のように言われるかもしれない。けれども、その世界はもはや一人一人が本当にその世界へ入って生きて行く上の課題であるので、自分の中で自分の問題を作って自分で解決していかなければならない道なのである。自分の立場からそういう親鸞聖人の世界はどうだこうだ、とか。唯円房の世界はどうだこうだというような事は言うべきものではないと思いますね。また言ってみたとしても、それは何の意味もないことなのである、こっち自身には。　我々としては一生懸命に親鸞聖人の生きていかれたお姿の跡を、一生懸命に追っ掛けて行く。そのお姿を唯円房が親鸞聖人の生命の中に入って、親鸞

だか唯円だか分からない一つの新しい生命として『歎異抄』というものを生み出してくれている。その中にこっちの生命をどこまで入らせて貰えるかというだけの問題なのではないでしょうか。



いつも似たようなものばかり書いているから、どうも・・・平面と立体との関係もあり・・、つまり自力の世界は自分で自分を追っかけて行く一つの道であるから。そうして行ったあげく絶望して、自分が自分に帰り普通なら絶望したらそれっきりになってしまうのだけれど、自分だけになってしまうのだがこの場合の絶望は絶望にして絶望でないので、絶望して新しく生きたという形で。だからここでは仏様がこの衆生の世界からズーッと『華厳経』の十地の世界の境遇を経て、十段階を超えて仏の世界に入られた。これをその通り追って行こうというのが聖道門である。

ところが親鸞聖人や法然上人はそれを追って行かれて最後の処まで行かれたが、ここで仏様が仏の世界に入ったということは同時に衆生の世界に帰られたということになる。自分が救われただけではない衆生そのものを全部を救わなければならないと、ここ（衆生）の世界へ帰られた。

この世界に仏が新しく生き返って下された。ということはここでハッキリ分かったから、それならば我々は仏様になる必要は何もない。自分自身は本来の衆生としてここに生きていたのだから、仏様がここに帰って来て下さったのだから、それならここでこっち（衆生の世界）へ帰りましょうと。衆生は衆生として、衆生の元に帰った。

ただし、スタートの時の衆生とそれから帰って来たときに衆生とは違う。これは一応仏様の処へ行って帰って来た。ということは、ここでは煩悩熾盛の凡夫というこ

とは頭の中にはあったでしょうが、実際は「まだ悟っていける。清らかになっていける」と、煩悩を克服していけるとそういうそういう聖道門で行った訳である。自分に勝てると思って行った訳である。

けれどもここまで来てそういうことはもう意味がないということが分かって帰った自分は、ハッキリ「自分というものは誠に煩悩熾盛、罪悪深重以外の何者でもない」それで結構だと言ったらおかしいけれども、本当にそれ以外の何者でもない。これは装飾でも、卑下でもなんでもない。正真正銘これだけなのだ、と。ということは仏の光りにパーッと当たっているからである。仏の光りに照らされて自分自身の正体を見ているのだからごまかしようもなにもない。卑下でもなんでもない。こう言ったら仏様から軽蔑されるか、そうではない。仏様にお前らは駄目だと蹴られるかというとそうではない。お前らはこういうものだぞと仏の暖かい光りが当たってこういう姿が見えたのであるから、掛値なしにこうなのである。

こういう正体をもって我々は五十年を生きて行く。実際朝から晩までこれ以外の何もないですね。よくテレビなどで思うのだけれど、自分はこういうような事業をしたと言う人もある。なるほど、例えば人の命を千人救ったというような功績を述べている人もある。ことに政治家などに多いですね。けど裏から見ると千人を生かした代わりにその陰ではその仕事をするために二千人の人を何らかの形で殺しているのかもしれない。そうしてみるとやっぱりその人は罪悪深重と言わざるを得ない。

一本の木ひとつでも、庭に菊をよく育てましたなあ。一本の木を育てるためにどれほど他の草を殺しているかもしれない、例えて言えばですね。

学校の先生の場合は非常に成績を上げたと言われる人もあるかも知れないが、成績を上げた先生がそれだけ一方でどれほどの子供にマイナスの部分を与えているかもしれない。世の中がそういうようになっているのだ。

だから比叡山でスタートしたときの法然上人や親鸞聖人と、ここまで行って仏にならないで、そうだったかと思って気が付いて帰って来たときの法然上人、親鸞聖人とは同じ「凡夫」には違いないが、あとのは煩悩熾盛、罪悪深重という「自覚の凡夫」であるのですね。これで初めてこの世界に解放されて、いままでは勝ったか負けたか、しっかりやったかやらないか。いや、「知恵第一の法然房」と言われる以上は、第一ではない第二・第三・

第四・・・とズーッと競争相手があった訳でしょう。そういう窮屈な世界から全く解放されて、「オーッ、俺が本当の煩悩熾盛、罪悪深重の凡夫だ」、と。この世間の上を大手を広げて、誰憚る事なく罪悪深重の自分だ。そうだからこそ上から暖かい「至心、信楽」「欲生我国」の光が射してきて有り難い。誰憚ることなく「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と大きな声で称えられる。

行く先はというと、ちゃんと「自分の家へ、来い。来い。」「自分の国へ、来い。来い。」と言ってくれている人がある。なにも心配は要らない。それは、金持ちになるかならないか、病気になるかならないか、こいつは分からぬ。いつ死ぬか死なぬかそれも分からぬが、それは業縁に任せるしか仕様がない。業縁もただこのものを作るだけの業縁であって、それ以上のなにものもない。これはただ業縁に任せるだけであるから、「無碍の一道」である。何も碍げるものもない。

『歎異抄』の言いたいところは「至心、信楽」に更にこの「欲生我国」、これが付いていることなのである。これが唯円からみた親鸞聖人の本当におっしゃりたいことなのである。言い換えれば『歎異抄』の根本概念がここにある。そういうことが、曽我先生の『歎異抄聴記』の初めのほうに述べておられるのですが。

どうも、前には、「至心、信楽」までは何か分かるような気がするのだが、「欲生我国」がついているのが、どうも分からなくてそこは申さないでおったのですが。

以上